おじいちゃん　ありがとう

小　五

ぼくのおじいちゃんは、五年前にのう出血でたおれてしまいました。そのこういしょうで、右半身が不自由です。右の手と足は動かすときにとても時間がかかります。言語しょう害もあるので、話の内容が聞き取れないこともあります。でも、耳はきちんと聞こえているので、こちらの言うことは理解してくれます。

ぼくは、おじいちゃんのために何ができるかを考えました。そして、右半身が不自由なので、歩きやすいようにかたをかそうと思いました。

あるとき、いっしょに出かけることがありました。左手でつえをついているので、右側に行って、

「おじいちゃん、ぼくのかたをかしてあげるよ。」

と、言いました。

すると、おじいちゃんは、

「うれしいよ、ありがとう。」

と言って、ぼくのかたに手をかけました。

ぼくは、おじいちゃんの歩くスピードに合わせて、ゆっくりと歩きました。こんなにゆっくりと歩いたことがなかったので、はじめはびっくりしたけれど、自分がふつうに歩けていることは、当たり前ではないことが分かりました。

少しの段差やしゃ面でも、バランスを取りながら歩くのは、とても大変です。そういうときはかけ声をかけています。

「おじいちゃん、階段だよ。左足から上

ろう。一、二、三。」

と言って、一段ずつ上がります。

最後、上りきったときは、おじいちゃんとにこにこして、

「ばんざい。やったね。上りきったね。」

と喜び合いました。ぼくは、おじいちゃんがこんなにも喜んでくれたことが、とてもうれしかったです。

ぼくは、おじいちゃんのためにできることがあったら何でもやって、役に立ちたいです。言葉はうまく話せないけれど、心と心が通じ合っていれば、相手を喜ばせられるし、自分も喜べます。おじいちゃんは、いつも感謝の気持ちをわすれずにいるので、すごいと思いました。

今は何でもできる自分だけれど、それがいつまで続くかは、分かりません。こんなことを考えたことはなかったけれど、おじいちゃんのおかげで考えることができました。だから、おじいちゃんには、とても感謝しています。

これからも、おじいちゃんや体の不自由な人のために、ぼくは、勇気をもって行動し、役に立ちたいです。そして、おたがいに笑顔になって、幸せになりたいです。